

槐

かい

岡井省二創刊

平成22年1月号

平成二十二年一月一日発行 第二十五巻第一号 通巻第二三三号 毎月一回一日発行
平成二十二年九月十八日第一種郵便物認可



真影

高橋将夫

正月はひつそりとしてきらめきて
大日の心なりける初御空
黒豆に囲まれてゐる芋頭
愛込めし雑煮の餅のよく延びる

正月の雀と僧とされかうべ
面打てば胴を返され寒稽古
待つてゐる札はなかなか出ぬ歌留多
知る人に出会ふことなき初詣
空海の肩なめらかに初明り
真影を水面に映す初御空
初明りして億年の刹那かな

槐安集

水野恒彦

サルビア燃え男くささの省浄忌
荒らぶれる魂ともなりて鷹渡る
秋思ともなく襖の火を燃え立たす
鉛筆を落し音なき真葛原
白砂にうらがへりたる秋の蟬

延広禎一

瓜坊によるけ縞ある省二ノ忌
玉の緒や省二節子の足湯して
露と露結ぶ音して省二ノ忌
土佐和紙に飛白体ある秋気かな
着ぶくれて「悪党芭蕉」と黒鉛と

槐安集断片
大正六年
又んじりさうん教師子留



加藤みき

あらたまの年の闇へと踏み出しぬ
何もかも小さしちさし稲光
えのころの穂に鈴なりの水の玉
秋夕焼三輪明神の大鳥居
日日使ふもの身ほとりに去年今年

石脇みはる

神さぶる甌穴あまた秋日影
秋来たり山椒魚の艶増せる
菊日和大甕に水満たしけり
稲掛けし帰りは父の影踏みつ
秋天を二つに水上バイクかな

中島陽華

金毘羅の門に音あり木の実降る
水分の山の風あり秋の冷え
猪威し高鳴りて陶の如意棒か
待宵の越の国より八束脛
かの遺髪字彙にありける秋思かな

栗栖恵通子

省二忌の精子の雨となりにつけり
残る虫匏の尻を叩きををる
田仕舞の醜女が山を眠らせぬ
天晴や除福の山の笑ひ茸
極月のドボンを引いてしまひけり

竹内悦子

鬼灯の赤は大日如来かな
金木犀銀木犀や牛の鼻
杜鵑草みじかく剪つてしまひけり
芭蕉葉の二つの影のさやさやと
石階に向き合ふ楷の紅葉かな

大島翠木

言霊はくれなゐならず吾亦紅
月かげを遠心に置く赤衣桁
十五夜の螢光灯の紐を引く
センチメンタルそして論客十三夜
冬銀河やがてはよもつひらさかに

雨村敏子

身のどこか記憶ありけり蘆火燃ゆ
枯れ切つて蓮の穴のまんまるに
通草笑うて山姥のあらはるる
秋滯を残して四方の暮れにけり
暎炎上曼珠沙華の夜にゐる

小形さとる

兀々とぬくぬくと桃の実食む
秋果ひとつ何ゆえの縦の線
岩頭に立つ月の香を嗅ぐ人か
往くのみ道か白萩咲きみだれ
霜月の山羊のハナコとその母と

本多俊子

もの思ふとき月夜茸に突きあたる
萩の実や穴のいくつも埋めずおく
身の芯に月光の青垂すい涎げんす
渦潮の真ん中にある秋意かな
月満ちて青き匂ひのありにけり

久津見風牛

頼られてたより切つたる松手入
野分あと陽は光芒を草に引き
欠伸でる日和に迷ふあなまどひ
矢面に立てば草矢も受けがたし
たかむしろ括るに妻を呼んでをり

近藤 きくえ

芭蕉葉や師の温顔と下駄の音
笹舟に水神おはす水の秋
水澄むや小魚の影のきびきびと
堰落つる水の和音の星月夜
花蕎麦の波うつ中に紛れゐる

近藤 喜子

精霊の青き夢みる月夜茸
悔のなき色となりたる万年青の实
ヴィーナスの誕生うす紙ぬぎし桃
鶉のこゑ吟遊詩人むかへたり
ひそやかな愁ひ南蛮煙管かな

谷村 幸子

かはらけの嬉しく飛びぬ秋の山
方丈の縁に座しをり萩の風
雁がねや土に石灰まぶしをる
岩座に日の当たり来し青鷹
蓮飛んで河内木綿の女将かな

瀬川 公馨

巡業の大道芸人早生みかん
草の花すつかり刈られるたりけり
冬の辺や夢二の慚愧ありありと
ハリ鼠のワルツらしきや片時雨
赤梨の家空けられぬ事情かな

槐市集

中野京子

鬼灯や灯の点りたる腹の芯
切れ味のよろしき話今年米
人影を嗅ぎをる犬や鯛雲
吾亦紅身は吹かれつつ真つ直ぐに
天心と地心を結び玉の露

中道愛子

菊日和大手門より入りけり
雨音のやがてはげしく実紫
炊きたての松茸飯をまず亡夫に
みちのくやもつてのほかの菊膾
ゆきずりに呼びとめられし在祭

西村純太

露の玉壊れて水の生れけり
致死量の毒もて美しきとりかぶと
死者を越え生者を越えて霧通る
人間じんかんは何のメタファー木の实落つ
光陰をたぐりよせたる蔦かづら

橋本正二

秋の夜お福の顔と笑ひあふ
絵に描いてさみしき花よ曼珠沙華
マネキンのヌードの眸澄んでをり
人魂の集うて青し月の夜
台風の眼は静かなり赤ワイン



槐集

高橋将夫選

平城京跡

芋の葉や宝珠かかげし大極殿
枝豆の青さ村上春樹あり
榎植の実思ひ思ひの場所のあり
松ぼくり開き三千世界かな
月光や肺しるがねに染まるまで
千の手にとどく柿熟るる日本かな
藁塚に風とどまりて耀へる
秋夕焼釜中の魚のごときかな
秋耕の残り根深く張つてをり
一日をとかず紅茶の夜長なり
十六夜の月浪速から大和から
天井に物音のあり茸汁
護摩焚の老僧のをり穴まどひ
えぞ鹿の大振りの角カムイかな
死ににゆく鮭遠山の白くあり

枚方 富松 寛子

中野 京子

摂津 中田 禎子

らくがんのほろとこぼれし秋微雨
団栗と目くばせ交す山の晴
母の針目紅絹に残りし秋日和
真田紐の湿りてをりぬ野分あと
名月や四つ身の着物広げをる
蓑虫のひそかに覗く尼の貌
萩乱れ月の兎がよよと泣く
墓碑銘をなぞるや軋む秋ひとつ
蚯蚓鳴く心かすかに罅わかれて
野晒しを蔵してそよぐ花すすき
おくんちや皆異形なる幸魂
鯨日和陸くぬがに棲みて四億年
鉈籠に摘み入れられし秋没日
花野より花野へ渡る火喰鳥
空を截る径一ミリの流れ星

枚方 近藤 紀子

東京 西村 純太

守口 柳川 晋

銀河往来 高橋将夫

◇「槐集」 観照

月光や肺しろがねに染まるまで 富松 寛子
月光で肺がしろがねに染まるまで、無心に月を見つめている作者の姿がそこにある。へしんしんと肺蒼きまで船の旅 篠原鳳作」という句がある。これは船旅の句だが、月光の句の作者の場合病と同行の旅である。それだけに、強く心に響いてくるものがある。

秋耕の残り根深く張つてをり 中野 京子
耕すといえば通常は春だが、秋の収穫が終わった畑に冬のものや早春のものを育てるために土を起している情景を見る。何かは知らないが、深く根を張っている草があったらしい。雑草のたくましさでエールを送りたい。

十六夜の月浪速から大和から 中田 禎子
浪速で見る月も大和で見る月も、月は一つだが、浪速からも大和からも別々に月が昇るようで面白い。十五夜の月でなく、十六夜の月であるところが奥ゆかしくもある。

らががんのほろとこぼれし秋微雨 近藤 紀子
秋にも梅雨のようにじとじとと雨が降る時がある。秋霖とも秋微雨（あきついでり）ともいう。そんな湿った感じと落雁の菓子がほろほろとこぼれる感じの対比が実に鮮やか。

蚯蚓鳴く心かすかに罅われて 西村 純太
秋の夜、何かが鳴くような音が耳につく。蚯蚓でも鳴いているのだろう。よく聞くと、どこかに罅でも入ったような声だという。作者の心の持ちようなのだろう。精神の風景。

花野より花野へ渡る火喰鳥 柳川 晋
鳥だから花野から花野へ渡り歩いて、目くじらを立てることはない。しかし、火喰鳥とは恐れ入った。この火喰鳥、きつと作者に違いない。ユニークな一句。

戯言の中に真実木の実落つ 岩月優美子
ざれごとと聞き流したが、考えてみたら当っている：確かにある。木の実がポトンと落ちたのを見て、ふと真実に気付いたのかもしれない。

大法螺の風呂敷畳み秋惜しむ 竹中 一花
何の大法螺をふいたのかは知らないが、とりあえず始末をつけた。それにしても冬を前にして、あの意気軒昂だった時期がひとしお偲ばれる：そんなところか。

天地の甘露とじこめ黒葡萄 岡 尚美
黒葡萄のあの甘い果汁は確かに甘露かもしれない。甘露は天が祥瑞として降らす甘い液という伝説があり、不死の霊薬ともいわれる。こよなくめでたい。